

20世紀初頭における国文学の展開(1)

—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(6)—

The Development of Japanese National Literature in the Early 20th Century(1)

—A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State”(6)—

大本達也*

Tatusuya OMOTO

Abstract

This paper examines the development of Japanese National Literature in early 20th century. FUJIOKA Sakutarō (1870-1910), who taught the Japanese national literature in the Imperial University from 1900 to 1910, maintains that the development of the literature relates to a nation's character. This paper assesses the development mainly through *The Lecture of the history of Japanese Literature (1908)*.

キーワード：日本文学史、帝国大学、藤岡作太郎、国文学史講話、武士道

序論

本論は、各論 3-1 である「1890 年における国文学の誕生」(『CANPANA』13 号 2006)、及び各論 3-2 である「1890 年代における国文学カノン形成」(『CANPANA』14 号 2007) の続編であり、各論 3-3 にあたる。各論 3-1 では、三上参次・高津歙三郎『日本文学史』(1889) により初の日本文学史が成立した状況を考察し、各論 3-2 では、芳賀矢一『国文学史十講』(1899) に至るまでの国文学カノンの形成過程を追った。各論 3-3 である本論では、藤岡作太郎 (1870 - 1910) の著作を通して、20 世紀初頭における国文学の展開を検討する。すなわち、藤岡の国文学研究が、「国民 Nation」にとって文学、すなわち「国民文学 National Literature」の探究であったことを検証するのが本論の目的である。

*本学非常勤講師、近現代日本文学・思想 (Japanese Literature in 19-20th Centuries)

藤岡は加賀・金沢出身で、第四高等中学校の同窓生であった西田幾多郎（1870-1945）、大拙・鈴木貞太郎（1870-1966）とともに「加賀の三太郎」と称されている。帝国大学国文学科を卒業した藤岡は、1899年にドイツ留学した芳賀矢一（1867-1927）の後任として、1900年に帝国大学助教授となり、1901年に帰朝した芳賀とともに20世紀初頭における国文学研究の中核を担った。国文学関連の著作としては、1901年の『日本文学史教科書』（以下、『教科書』）、1905年の『国文学全史—平安朝篇』（以下、『全史』）、1908年の『国文学史講話』（以下、『講話』）がある。さらに、藤岡の講義草稿および聴講者による講義筆記などによって再構成された遺稿集に、1915年発行の『鎌倉室町時代文学史』（以下、『鎌倉室町』）、江戸文学を扱った1916年の『近代小説史』がある。

このうち、藤岡の代表作とされてきたのは、初版本の本文726ページの大著『全史』であり、東洋文庫、講談社学術文庫にも入れられている。この著作は平安期のみを扱ったものだが、『全史』とされているように藤岡は、通史としての「国文学史」を数巻にわたり書くことを意図していた。けれども、1906年から1910年にかけて『鎌倉室町』の元になった講義をしている最中に早世したのである〔藤岡 1949:359〕。本論では、藤岡の国文学全般に関する思想を探るため、本文360ページの著作ではあるが、「通史」として構成された『講話』を中心に考察することにする。

藤岡はその『講話』の冒頭で《一国の文学はその国民の思想を表はすものならざるべからず》と言い〔藤岡 1908:1〕、国文学と《国民》思想の相関性を強調する。すなわち、《国民文学の特色》は、《国民の特性を発現》するところにあるとし、《国民文学の花》には《よく国民の特性を発揮する時は栄え、これを蔽^{おお}ふ時は振はず》という《特性の蕊^{しべ}》があり、両者には相関関係があると言うのである〔同:3-4〕。それでは、この国文学盛衰の鍵となる《国民》性とは何だろうか。以下、藤岡の主張する文学と《国民》性との相関関係を時代別に追っていききたい。

なお、文中、引用は《 》で、出典は〔 〕で、大本による注釈は（ ）で示した。引用については、旧漢字を常用漢字に改める、難読字にルビを付す、皇紀を西暦に変換する（藤岡は一貫して皇紀表記）などして、読みやすさに一定の配慮をした。

1. 太古における《尚武の氣象》

《太古》の文学は、外国文芸の影響を受けていないか、もし受けていても極めて少ないため、他のどの時代よりも《わが日本国民》の《本来の国民性》が《最も赤裸々に表》わされており、《純粋なる日本国民の感情》が《ありのままに打ち出》されていると藤岡は主張する〔藤岡 1908:34〕。藤岡はこの時期の文学作品に《国民》性の源流を見出しているのであるが、その《本来の国民性》とはいったい何だろうか。

藤岡は、《神代より紀元を経て奈良朝の終、平安奠都^{てん}に至る間》を《太古》とし、《大化

以前(神代-645)と《大化以後(645-790)》の2期に分ける[同:34]。まず、藤岡は、《大化以前》においてはいわゆる《族制政治》が行われていたのであり、家族と国家との間には緊密な関係があつて、両者に大小の区別はあるが、その元は一つであると言う[同:7]。家族と国家の一体性を示すために、藤岡は《山の如き岩戸は開けて、瞳々たる旭日天地を別ち、是非を明らめ、民衆その光明に浴して、各自の分を尽すを得たり》と天岩戸神話を持ち出し、《大君いましてその下に国民あり》と強調する[同:5-6]。そして、記紀神話は《天照大神の御稜威及び天孫降臨の偉蹟》を主眼としていること、大神に対して八百万の神々による《背叛の言動》があつたことは伝えられていないこと、常に大神の《旨を奉体して従順の意を表》わしていることなどから、《わが国体の動かすべからざるものあり》、《太初よりわが社会組織が家族制に成りて、族制政治の行はれ》ていたことがわかるとする[同:46]。このように藤岡は、《国家は即ち父子夫妻兄弟を廓大したるもの》であり、《小にして家を成し、大にして国を成し、家族は団欒して一人の如く、国家は和諧して一家の如し》であるとし、《日本国民最大の特色》は《団結の強固》なこと、《全一体として相離れざる》ことだと強調する[同:5-6]。

《楫なき舟は行方を知らず、主腦なき団体は蜘蛛の子と散るべき烏合の集》であり、《国民にはこれを導くべき理想の光》がなければならぬが、日本《国民》は《かけまくもあやに畏き現つ御神(天皇)を上にかぶき奉る》のだとする[同]。そして、《日本の社会は一大なる家族》であるが、天皇は《専制の君》ではなく《国民》は《不平の民》でないと述べる[同:7]。このように藤岡は、天皇統治による家族主義、強固な団結心という《国民》性を記紀神話の中に見出す。さらに、《歴代の聖帝は即ち不窮の後に天祖の神霊を体現したまふもの》であり、《天つ日嗣の御名は国民が古今に通じて奎運^{けい}発展の教化を仰ぐところの目標》であるとし、《奎運》すなわち文芸の発達と天皇との相関性を示唆するのである[同:6]。

次の《大化以後》では万葉集についての議論が多くを占める。1901年の『教科書』においては人麻呂と赤人の2人が《壮大を極む》と評価され、以後《衰頽の兆》が現れ、憶良、旅人、家持はその《衰頽の代表》であり、前の2人に及ばないとされていた[藤岡1901:12-3]。けれども、1908年の『講話』では、家持は《人麿、赤人と並び論ぜざれ、万葉の上、和歌の上に、重要な地位を占むる》とされるようになり、《国民的特性》を歌い、《詩味横溢せる》ことがその理由とされている[藤岡1908:77]。

それを示す例として、まず長歌(巻第18・4094)の一部から「海を行き、水びたしの屍となつても、山を行き、草むした屍となつても、大君のおそばで死のう、後悔はしない」という意味の句、《…海行かば/水漬く屍^{かばね}/山行かば/草むす屍/大君の^へ辺にこそ死なぬ/顧みは/せじ…》[小島:263]が提示される。そして次に「次の長歌(巻第20・4465)の一部が引かれる。

…天皇の^{すめろぎ}/天の日継と/継ぎて来る/君の御代御代/隠さはぬ/明き心を^{すめらへ}/皇辺に/極め尽して/仕え来る/親の^{つかさ}職と/言立てて/授けたまへる^{うみのこ}/子孫に/いや継ぎ継ぎに/見る人の/語り次てて/聞く人の^{かがみ}/鑑にせむを/あたらしき/清きその名ぞ/おぼらかに/心思ひて/^{むなごと}空言も /親の名絶つな/大伴の/氏と名に負へる/ますらをの伴 [小島:431-2]

上の引用は小学館版の日本古典文学全集を参照したが、《空言》が藤岡の場合《むな子ども》[藤岡 1908:76]になっているなど、若干の異同はあるが、「清く隠すことのない心をもって神武天皇の代から天皇に仕えてきた大伴氏の栄光を語り継げ」という大意であることに変わりはない。

この2つの歌を、藤岡は《よく国民固有の性情を歌ひて、国体のよりに立つところを明かにし、武士道のよりに成るところを示すもの》だと解釈する[藤岡 1908:77]。この万葉集に《武士道》の源泉を見るという解釈の説明はこうである。まず、日本の《国民》のうちには古来《尚武の気象》というものが存在してきたが、それは《進むを知りて退くを知らざる》精神である、すなわち《自己の仕ふる主の為に一身を鴻毛の軽きに比せる忠義心》であって《自己の胸臆を傾け尽すところの真心》である、このような《国民》の《皇室》に対するやみがたき性情は特別な階級に限られたものではなかったが、中世において武士における《主に対する道義》として凝結し、そこに《儒教の名義》と《仏教の教理》が付加されて《一個の道徳律》として発達した、そしてそれが江戸時代において理想化され、《確然たる種々の形式》が定められ《武士道》となった、と言うのである[同:175-7]。

さらに、藤岡は《尚武の気象》について次のように熱弁する。

尚武の気象！ああこは国初以来終始一貫せるわが国民性の随一にして、近く露国が東侵の野心を挫きしはいふも更なり、文を以ては師と仰がざるを得ざりし三韓を神功皇后の古にありてまず破りたまひき。額には立つとも背には矢は立てじとは早く上古の信念にして、文学偏重の平安朝にありてだに、ひたすら柔弱に流れたるは京都における上流貴族のこと、地方にありてはなほよくこの気象を保存するに止まらずして、これを奨励琢磨し、その代表者たる源平等の武士が入つて京都に勢力を得ると共に、更に大なる風をなす。[同:175-6]

このように、藤岡が《尚武の気象》を称える背景には、日露戦争による高揚感がある。事実、1905年の『全史』は以下のように書き始められている。

われら何の幸か、この昭代に遇ひて、千古未曾有の大戦を見、みずから戦勝国の民と誇ることを得るや。20世紀の歴史の第1章は日本の勃興を以て始まる、その急速なる飛躍

は東西古今にその比を見ず、まして黒船に驚き、オロシアに恠えしわが祖先が、夢にだも想ふこと能はざるところなりき。弘安の元寇、ただ台風の倅せしのみ、文禄の征韓、寸功もなくして果てぬ、これらの小戦闘を以て国史の最大事件とせし祖先は、誰か、今日、茫々たる満洲に数十万の太兵を動かし、偉大なる万里遠征の敵艦を日本海上に^{みなごろし}塵にすることを測り得たる。わが国民は小説よりも大なる物語を実現せり、欧米各国はいづれも瞠若として、或は驚歎の眼を睜り、或は猜忌の色を浮べて、絶東の新進国を見、われはみづからまた意外の成功に、その天佑か人力かを疑はざるを得ず。[藤岡 1905:1 - 2]

この『全史』の冒頭からは「戦勝」の興奮を抑えきれない様子がありありと伝わってくるが、その感情は『講話』において《国民が固く団結し、かくして得るところの勢力を自覚する時に、詩人は彬々として排出す》^{みは}という理論に定式化され、万葉集はその理論の実例として位置づけられるに至る[同:9]。

以上のように、藤岡は天皇を中心とする家族的団結心と、それを支える《武士道》の源流を《太古》の文学に見出したのである。

2. 平安朝における《国民の自覚》

藤岡は、《階級の制》は、平安朝に至って《一時の極》に達したと言う[藤岡 1908:11]。そして、階級制度を喜ぶのは《わが国民の特性》ではなく、《歴史に現はれたる一時の現象に過ぎ》ないが、いったん《階級制》が生じると、それを《永遠の実相と錯誤》し、《軌範》とするようになり、《国運の沈滞不振を促す》と指摘する[同:13]。つまり、《祖廟を祀》ることは《祖先を神と拝し、英雄と望む》ことにつながり、そのような《古人の崇拜》は《先例の踏襲》となり、それが《因循固陋^{ろう}の弊》となる、そうなると、個人の才能は発揮されず、《模型の中に押しはめ》られ、個性は削り取られてしまい、多数の為に少数を犠牲にすることで、《才識ある個人も無学の団体の前に勢力》がなくなり、《個人もおのずから団体の指導に依頼して盲動》するようになる、と言う[同:13-14]。

一国文芸の隆盛はもろもろの作者が現代の社会に対して多大の感興を有し、自家の文筆に不敵の信念を抱きて、その外国もしくは古代に比較して一步を譲らず、否、むしろ二三歩を進めたるものあるを自覚せる時代なるべくして、或は外国文学の移植に汲々とし、或は古代作品の模倣に自己を忘却せる時代にあらざるなり[同:111]。

このように藤岡は、外国や古代の作品の模倣に陥ることで個性が発揮されなくなり、《国民》文学の発展が阻害される要因のひとつを《階級の制》に見るのである。

次に、時期別に見てみる。藤岡は平安期を、《弘仁時代（790 - 890）》、《延喜天曆時代（890 - 990）》、《藤氏極盛時代（990 - 1090）》、《院政時代（1090-1190）》のそれぞれ100年間、4期に分ける[同:94]。

まず、《弘仁時代》について、この時期は《漢文学崇拜の時代》であるが、《国民》は《漢詩の不自由と束縛》とに堪えられなくなり《和歌を思ふ》に至ったのだとし、《和歌勃興の急先鋒》として菅原道真を挙げている[同:101-2]。道真は外来のままの《詩形作風の模倣》だけでは《わが国民の思想》と相容れがたいことを見抜き、《従来の作家を呪詛して、盛に和臭の注入を試み》たと評価している[同:100]。このように藤岡は、道真を《国民》的個性発揮のパイオニアと位置づける。

次の《延喜（天曆）時代》だが、古今和歌集に代表されるこの時期は《国民自覚の時代》であって、和歌が勃興した時代だと藤岡は言う[同:110]。すなわち、《自国文学の復興に力め、外国文学を厭して》、和歌が《大に起》った時代とするのである[同]。藤岡は、古今集は平安期を通じて永く《和歌の軌範として尊奉》されただけではなく、《国民詩の基礎》を初めて固めたと指摘する[同:112]。つまり、醍醐天皇が《官位極めて卑しき人々をしも篤く信じて》編纂という《空前の事業》を託しただけでなく、撰者らもよく《自己の才を信じて》編纂作業に当たり、《君臣合体、動かすべからざる信念》の上に古今集は成ったものだというのである[同:111-2]。

中でも藤岡が重視するのは貫之である。いわゆる《平安朝の歌体》は貫之がはじめて確立したのであり、《永く範を後世に垂れたり》と称える[同:118]。歌人としての貫之は《天才者の域を去ること遠》かったが、古今集の撰者としての貫之は《浮華軽薄、一時の興になれる》歌の矯正に極力努めたと指摘する[同:115]。さらに藤岡は、古今集の仮名序は大堰川行幸の歌の序とともに《和文》の上にもまた《一体を確立》したと貫之を評価する[同:119]。すなわち、《和文》作品としては、すでに竹取物語、伊勢物語があったが、これらは小説・歌などの《軟文学》であり、論説や序、跋などの《硬文学》に属する著述はなかったところに、貫之は漢文に対して《和文》を《創めた》のであり、《渾然萃然としてわが国文の^{さきがけ}魁》をなしたとするのである[同]。

一方で、《延喜時代》においては《国民的気風》が一変し、これまで《文芸の上に昭として明かなりし国民特殊の性質》がかえって《滅却の運》に向ったとも述べている[同:114]。藤岡は、その《滅却せられたる国民的性情》とは《尚武的気象》であり、万葉集で人麿が《堂々として建国^{そう}勲業の事実を歌ひ》《声を大にしてわが国体のあるとを疾呼》したのに対し、平安期に至っては《文弱の風偏へに国民を^{なび}靡け文壇を靡け》、万葉の時代とは《別人種ならざるかを疑はしむ》ほどであると嘆いている[同]。

次の《藤原氏全盛時代》は、《漢文心酔》の時代が遠のき、《国民》が《漸く自覚の歩を進め》たことで、《国文学の勢力》が《遙かに漢文学の上に》出た時代であり[同:126]、《日

本文学の黄金時代》であるとする[同:131]。そして、この時期に成立した枕草子と源氏物語とを《わが国に匹儔^{ちゅう}を見ざる傑作》、つまり並ぶものない傑作とする[同:132]。藤岡は、《栄華に甘んじ、その順境に満足せる時代》と、《ひたすらに古を慕い、来るべきに慄がれて、現実世界を無視悲観せる時代》とがあるとし、前者はその時代に対する《自信の存在を示し》、後者は《その欠乏を自白》しているとするが、この時期の創作は後者に属すると言う[同:142]

平安期最後の《院政時代》は《単調柔弱なる平安朝の旧風に飽き来れる時代》であり、次の《鎌倉時代》入る過渡期であるとされている[同:165]。

以上のように、平安期は、《武士道》が衰微した時代ではあるが、天皇を中心とした《国民》的団結心と中国の影響の排除により、《国民》文学が大いに栄えた時代とされるのである。

3. 中世における文学の衰退と《武士道》

平安期と江戸期には含まれた時代を藤岡は《中世》と一括し、《新古今時代(1190-1230)40年間》、《鎌倉時代(1230-1330)100年間》、《南北朝時代(1330-1400)70年間》、《室町時代(1400-1600)200年間(戦国及び織田豊臣時代をも含む)》の4期に分類する[藤岡1908:183]。

まず、藤岡は、《中世》ほど乱れた時代はなく《文芸の衰えたる時》はないとする[同:167-8]。

封建の世、群雄の割拠は諸国を区々に分離し、遠近隔絶、民庶は城下あるを知つて国家あるを知らず、幕府また政事を左右して、皇室の尊嚴^{おほ}を蔽ふ、支離滅裂、仰ぐべき理想の光明も暗雲に蔽はれたる時、国民は方向に迷ひて、合一的動作を能くせず、国力と文学を併せて疲弊するも、自然の勢なるべし[同:11]

このように藤岡は、天皇の威嚴が損なわれて諸国が分立し、《国民》が惑うというように、中世は、尊皇の精神、《国民》的団結に欠けたことで国力とともに文学も衰弱した時代だとする。

では、時期別に見てみよう。まず《新古今時代》であるが、この時代は平安期の《院政時代》と《殆どその間にけちめを分ちがた》い時代であり、《厳格なる意義に言ふ鎌倉時代》は承久の乱の終了とともにその《第1頁を開く》のであり[同:186]、《古今時代と共にわが和歌の二大盛時として記憶》される時期だとしている[同:184]。このように、藤岡は新古今時代は《中世》ではなく《平安朝》に属するものとしつつも、《読者の混乱と誤解》を招くことのないよう《従前の方法に甘んじ》て《中世》に分類している[同:188]。

次に、承久の乱以降と定義された《鎌倉時代》を見る。藤岡は当時、歌壇において《萎

縮凋落》の趨勢が最も著しいと指摘している[同:202]。つまり、公卿らに自らを信ずる気持ち薄く、《自己の主張を滅却》したため、《偏に古を^{しょうきょう}愉悦》して《範を平安朝の盛時に求め》、盛んに模倣ばかりしていたと言うのである[同]。

一方で藤岡は、中世の新風潮として《尚武の気象》が勃興したことと《儒仏二教の感化》が《社会人心の根柢》に及んだことを挙げている[同:175]。《尚武の気象》は《建国当初既に存在》していたもので、儒教・仏教も上古より思想界に認められきたが、それが《鬱然一代の風をなし》つまり非常に盛んとなって《社会百般の事》がこれらを標準として決められるようになったのは、中世以降のことであるとする[同:175]。すなわち、武士道について、その《萌芽》は太古に現れたが《鎌倉時代に於て大いに發育》し、とりわけ南北朝に儒教、仏教思想と連関して特筆するに足る発達をしたと言うのである[藤岡 1949:19]。つまり、この時代の文学はこれまでの《平和艶柔なる恋愛描写》を一掃して《殺伐剛毅の気象を鼓吹》するまでになっただけでなく《克己》、《制欲》などの儒教の意義を明らかにし、《無常厭世の仏教的教理》を含蓄するようになった、《破壊に代ふる建設》はたいしたことはなかったが《清新の風》を多く吹き込んだとするのである[藤岡 1908:182]。

それでも、江戸時代に見られるような形式の複雑な武士道はこの時期にはまだ十分発達していないとしている[藤岡 1949:19]。たとえば、平家物語においてさえ後世におけるような《武士道の發現》はまだ見られないとし、平家無双の兵士たる筑後守忠能が、味方が都落ちする中、ひとりだけ離れて東国に逃げのび、宇都宮氏に隠匿されて余生を送ったことなどの例を挙げ[藤岡 1908:221]、《武士の志操気節の成熟して渾然たる一個の武的徳を形成する》のは《遙かに後にあり》と結論づけている[同]。

次に《南北朝時代》である。この時期の文学の《最大叙述》は太平記だが[同:232]、文学史上の大傑作とは言い難いとされる[同:235]。それは、平家物語には首尾一貫した《著者の理想》があるが、太平記では《著者の心と筆》とが事件の進行の間にしばしば動揺し、平家のように《高調に及ぶこと》がないからだという[同:233]。すなわち、太平記は、当初、後醍醐天皇による建武中興の業に《多大の尊敬と同情を捧げ》、《国民が向背すべき道義の路條》を示していたが、忠臣たる勇将が賊軍に下って矛を構えたり、兄弟が敵になったり、敵が味方となったりと、だんだんと《節義》や《恩愛》、《理想》、《主張》のない描写となっていき、《統一の美》に欠けるとされるのである[同:233-4]。藤岡は、これを国家の統一の欠如の影響が文学上に及んだ例だとしている[同]。

《室町時代》については、《新しき傾向》として《文学に個人の尊重せらるる》傾向があるが、この傾向については《双手挙げて賛称の意を漏らすに躊躇する》と言う[同:243]。それは、《この時代の個人尊重》というものが《国民の団結心の欠乏》や《社会思想の壊頽》がその極に達し、《国家的観念の失はれたる結果》、自然と生じたものであるからであり、《決して積極的に意識的に人格を認識》しようとしたものではないからであると言う

[同:243-4]。つまり、この時代は《日本六十余州》がそれぞれ独立して《一小国》の形態をとっていたため、《国家を一体とせる社会観》はおのづから存在し得ず、《士民は全くその小範疇きよくせきに踰躋》、天にせぐくまり、地に抜き足するような状況下で、《眼を大局に放つを忘れ》てしまったからだと指摘する[同:249]。そして、謡曲にこのような時代思潮が包含されているとされ、《ひらすら個人としての個人を描くに力めて、国民としての個人》は《国家を閑却せる傾ある》としている[同]。

以上のように《中世》は、《武士道》を育んだ時代であるが、《国民》における尊皇的団結心の欠落が文学的凋落をまねいた時代とされるのである。

4. 江戸時代における《現世主義》

明治を除いて《江戸時代》は文化がもっとも発達した時代であり、《わが国の文学はこの時代に至りて、とにかくに国民全般の玩ぶもの》となったと藤岡は言う[藤岡 1908:265-6]。また、《武士道》がその内容と形式を兼備し高調に達したのはこの時代にほかならないが、一方で国内は諸藩に分かれ《大なる統一的思想》を形成するまでには至らず、また藩内においても《上下階級の差別》が厳しく《平等の思想》を欠き、《公德心》もあまり高くなかったとしている[同:270-1]。

《江戸時代》を藤岡は《啓蒙時代(1600-1680) 80年間》、《京坂の盛衰(1680-1740) 60年間》、《文運東遷(1740-1790) 50年間》、《江戸の盛運(1790-1868) 78年間》の4期に分ける[同:281]。まず、《啓蒙時代》である。藤岡は、《平民文学》の発達が江戸時代を通じての《最も光輝ある特色》であるとしているが、この時期においては《平民文学》としての俳諧が発達したことを指摘しているだけで[同:286-7]、文学史上、特筆すべきものもないとしている[同:295]。

次に《京坂の盛衰》、いわゆる元禄時代である。藤岡は、この時期は江戸期中《国民》が最も積極的に活動した時代であり、思想も極めて自由で創意に富んでおり[同:347]、文学も《建設的》で《新意》に富んでいたとする[同:299]。そして、その背景には、《現代の賞賛》があったと指摘している[同:326-8]。

それはこういうことである。元禄時代における《国民》の心理を解剖すると、明治の《国民》の《感懐》と同じものがある。それは両者とも目を疑うばかりの自らの《長足の進歩》に驚くと同時に、実際に《歎美すべき社会の一分子として生存し、活動するを無常の誇りとし光栄》とするからだ。そして、そのように現代を謳歌する時代には古代に対する憧憬はなく、描かれるのは《一より十まで現実世界》に限られる[同]。《中世》の文芸では、《先人の所説》を《絶対無上の證権》とし、自らの《心眼》を運用しようとはせず、《唯々諾々として古型旧習》を守っていた。これに対し、元禄期は《新進気鋭何物にも拘泥するなき自由の精神を鎗として》、《従来のあらゆる慣習を衝破し》、《不羈き独立の大文学を樹立》

した[同:299]。

このように、藤岡は、元禄時代は《現世主義の時代》にして《自覚自身の時代》であり、《国民には外国よりもわが国が尊く、過去よりも現代が主》だった時代であるとするのである[同:315]。

元禄に続くのは《文運東遷》の時期とされる。藤岡はまず、この50年間は過渡期であるが、文学上特筆すべきこととして、真淵により国学の基礎が固められたことと、倫理学もしくは哲学として受け取られてきた漢学において《純文学の方面より見て、詩文として観賞される》ものが多くなったようになったことを挙げている[同:350-1]。そして、この国学と漢学の二大勢力がわが国文芸に及ぼした影響は極めて大きいとしている[同]。

最後に、《江戸の盛運》の時期である。この時期の前半期たる文化文政期の盛況は元禄時代に劣らないものであり、《徳川300年中の黄金時代》とされるのももつともが[同:374]、多くの作家は、《階級主義》、《保守主義》、《道徳主義》の《鳩毒^{ちん}》に悩んでいたとし[同:383]、とりわけ勸善懲惡主義の小説を批判する。

《勸懲主義は馬琴に至りて最高潮に達した》が、その主人公は《血あり肉ある人物》ではなく、《人間の最も自然》で《最も陥り易き情念》の《虜》にされることを拒む《忠孝仁義などの観念を寓せる傀儡子》であると批判する[同:389]。つまり、江戸期においては《家系尊重》と《個人没却》の二思想が人心を支配していたため[同:392]、家系を重んじ個人を無視するようになった、そして、必然的に自然や人生における《普遍美》を尊重し、《個性美》には冷淡となる[同:279]。そのため、この時代における《自己》は祖先より子孫に伝えられる《悠久なる時代の一期を画するもの》に過ぎず、その行為は祖先に対する《深重の関係》と、子孫に対する《重大なる責任》に縛られている[同:392]、それを反映して、文学においても《血肉なる個人》を描くのを忘れ、《世にあり得べしと思はれざる道徳完全の模範的男女》が空想されたと言うのである[同:279]。

文学において《典型を踏襲》することは、形式を追いかけることにつながり、《内容を忘れ》、《個人の心理的变化に注意せず》に《境遇の推移のみ重んずるに至り》、《個性の滅却》が生じると藤岡は指摘する[同:14]。そして、《複雑なる性情の発展》がなくなると、《善か悪かの類性のみを写》すこととなり、《おのずから単調無味に流れ》る、そして、この弊害を隠すために《纔かに事件の変化を多端ならしめて、読者の好奇心に投ず》ることになる、このような《個性の滅却はわが文学が屢々^{おず}免れざる弊》であると言う[同:14-5]。とりわけ馬琴への批判は強く、その倫理観は《極めて独断的にかつ偏狭》であり、作中の登場人物は《頑冥》、《固陋》、《没常識》で似たり寄ったりであると断罪している[同:394]。

一方で、極めて高く評価されているのは篤胤である。篤胤は平田派神道を興し、《二千年來》にわたって《万般の事物》の上に積み重なってきた《外来の文教の厭迫の一掃》を《大声疾呼》したが、そのことにより、《国民の自覚心》が《喚起》、《煽動》され、そこから《勤

王愛国の論や《攘夷の説》が勃興した、すなわち《明治の革新》は100年前の学者の脳裏にあったのだと藤岡は主張するのである[同:403-4]。

以上、江戸期については、《階級主義》による《個性の滅却》といった弊害はあったものの、《現世主義》により《国民》全般に文学が広がった時代であるとされる。

結論

1901年の『教科書』で、藤岡は明治文学の不振を嘆いていた。

…文体いまだ一に定まらず、俳句、新体詩等に筆を染るもの続々いづれども、歌道の刷新いまだ成らず、また欧米物質的文明の感化をうけて道義を重んずる念薄くなれば、小説の着想の如き、読むに堪へざるもの少なからずといへども有識の士に公私の徳義に改善を計るもの多ければ、この弊も次第に減ずべし。要するに当今の文学は、今や改新の半にあるものといふべし。[藤岡 1901:99-100]

ところが、1908年の『講話』では、明治文学の未来についてこう賞賛するようになる。

明治に至りて幕府は倒れて、国民は直に叡聖なる天皇の御稜威を仰ぎ、四民同等の権を得て、全一なる国家統合ここに成る、近来国運の駸々として発展せるもこれが為なり。赫々たる光明の下に、一般の社会を挙つてその読者とすれば、文学の隆々として興るべきは、当然の数のみ、或る人は既に古人を凌ぐ、将来の運は益々多望なり。[同:12-3]。

本論でも見たように、この論調の変化の背景には日露「戦勝」による自信がある。その自信を背景に藤岡はこう主張する。ヨーロッパの大国であるロシアに勝ったことで《国民の自覚》がより一層強さを増した、東西両洋の文明がお互いにその長所を失うことなく融合するのか、永遠に相容れないのかという問題を解決する使命を担っているのは、《世界における最旧文明国の一国民にして、また世界における最新文明国の一国民たるわれら日本人》以外にはないだろう、と[同:440-2]。

『全史』の冒頭では、その日露戦争における《戦勝の真因》として《武士道》を挙げている[藤岡 1905:2-3]。藤岡は古来の《武士道》こそが、《国民》を《不撓不屈の勇士》としたのであり、《武士道！この一語を以て、日本国民の大飛躍を闡明する連鑰とす》と叫ぶ[同]。このように藤岡は《武士道》こそが日本の躍進を明らかにする鍵であるとし、《古来わが国民が事に当つて遵奉せしところ》は、《一身を以て大君に捧げ、将卒相和し、同僚相励まし、忍耐刻苦争うて難に赴き、死に就く帰る》精神であると強調する[同]。そして、西洋におけるキリスト教と同様、《武士道》は《日本国民の宗教なり、道徳なり》と

宣言するのである[同]。日本の国運上昇に伴う文学発展の可能性を高らかに謳って『講話』はこう締めくくられる。

われら日本人はみづから奮つてこの使命（東西文明の融合）を果さむが為に、古今東西の文化の粹を蒐めて打つて以て一丸とし、これを悠久にまた無限大に向上進歩せしめんとするものなり。文芸発展の経路もこの国運と伴ひて年と共に新に年と共に熾さかんなるものあるべし、また多望なるかな。[藤岡 1908:441]

藤岡は、《金甌無欠おうの国体はその国民をして無限際に無限力を発揮せしむべし》と呼びかける[同:6]。そして、《国民》が《全一体として最も強固に統合》し、《理想の燈》が最も明るく輝く時、個人は国家の利益の為に死ぬことを惜しまない、現在を未来の犠牲とすることをためらわないときにこそ、《国運》が《振興》するとするのである[同:8]。麻生磯次は岩波版『講話』の「跋」でこう解説している。

個人は国家の利益の為に、一家を惜しまず、現在を未来の犠牲として憚らない。日本国民特有の団結力の強固なことは古今を通じて万国に比類のないところであつて、国民を指導する理念として武士道があり、更に最高の精神として皇道の観念がある。本書はこの日本民族特有の精神に就いて讃仰の言葉を惜しまないのである。[藤岡 1946:365]

麻生がいみじくも指摘しているように、《皇道》へと至る《武士道》は、まさに《国民を指導する理念》なのであり、「国民国家」日本を天皇の下に統合する「文化装置」なのである。この《日本民族特有の精神》を「国民文学」の中に「発見」することに藤岡は生涯をかけたのである。

参考文献

- 小島憲之他校注・訳（1975）『日本古典文学大系5・万葉集4』小学館
 藤岡作太郎（1901、訂正再版 1901）『日本文学史教科書』開成館
 藤岡作太郎（1905）『国文学全史—平安朝篇』開成館
 藤岡作太郎（1908）『国文学史講話』開成館
 藤岡作太郎（1916）『近代小説史』大倉書店
 藤岡作太郎（1946）『国文学史講話』岩波書店
 藤岡作太郎（1949）『藤岡作太郎著作集2—鎌倉室町時代文学史』岩波書店